

1965~

初代病院長小畠三喜男

創立

周年

を迎えます



1986~



2020

| 大阪部内島病院

年頭号

vol.195

2025

WINTER

2025年1月1日発行



地域とともに60年

2025 年頭のごあいさつ





みなさま、 新年あけましておめでとうございます。

病院長 小畠 廉平

もう新型コロナウイルスの脅威も今や過去のものと思われる方も増えてきたのではないかと思います。インフルエンザとほぼ同じ扱いになってきた印象ですが、引き続き当院としては感染対策を行っております。その一方でウクライナでの戦闘が未だに続いていることや、物価の高騰は世界情勢のみならず私たちの生活に今でも困難な影響を与え続けています。

さて、昨年は診療報酬改定と介護報酬改定が 同時にあった年でもあり、年始めからその対応の 協議で始まりました。国は診療報酬や介護報酬 の中で、医療機関や介護施設を施策的に誘導し ていきます。ですが実際現場と乖離した考えに基 づく施策もあり、国は現場の声を本当に聞いてい るのか?と疑問に思うこともあります。私も院長とし てなるべく現場の声を聞くようにしていますが、な かなか全てを吸い上げることができないのがもど かしいところです。今後もできる限り現場の声を 吸い上げて、その中から病院の次の方針につな がるヒントを見つけ出せればと思っております。

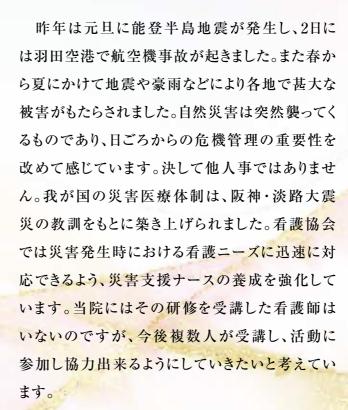
皆様は、新年と言えば何を想像しますでしょうか?初詣、雑煮、お年玉、初夢などなどありますが、そのうち初夢の「夢」について少しだけお話しさせてください。夢とは辞書を引くと「将来実現させたいと心の中に思い描いている願い」と書いて

あります。現在我々の生活の中でなくてはならないものは数多く存在しています。それは遙か昔から、「将来こんな事ができるものを実現させたい」という先人の夢が達成されたプロセスなのです。では私の夢は何か?というと、院長として病院を福山市北部の医療を支える上でなくてはならない病院にすることです。福山市北部に住んでいる方々の健康を守ることがミッションだと思っております。達成するには時間がかかると思いますし様々な困難もあると思います。中にはすべてのご要望に応えられないこともあり、ご迷惑をおかけすることもありますが、当院でできる限りのことをしていき、できることを増やしていければと思っております。

そして今年、当院は開院60周年を迎えます。この60年間、昭和、平成、そして令和と時代が変わってきた中で様々な変化がありました。医療のあり方も激しく変化してきた中、今でもこうして当院がこの地で医療が提供できるのも、ひとえに近隣の皆様はじめ当院と連携してくださる医療機関の先生方のおかげです。厚く御礼申しあげます。次の5年、10年、そしてその先も「地域に望まれる理想の医療」を提供し続けていく所存です。本年も皆様にとって良い1年であることを祈念しております。今年も何卒よろしくお願い申し上げます。

謹んで新年の ご挨拶を申し上げます。

看護部長 佐野 京子



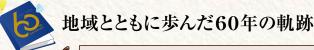
また2024年度は、マイコプラズマ肺炎も8年ぶりの大流行となりました。これからも様々な感染症に対する対策の継続は必要です。普段から災害や新興感染症へ備え、BCP(事業継続計画)の整備に努めていかなければいけません。訓練の在り方を見直し、BCPのブラッシュアップを図っていきたいと考えます。

今年は、第三者機関である日本医療機能評価機構の病院機能評価の受審が控えています。次世代医療機能評価のビジョンは「患者さんが安心して医療を享受でき、職員が働きやすく、地域に信頼される病院づくりに貢献する」です。受審は今回で5回目となります。受審を重ねるたびに、新たな課題が見つかり、さらにより良い医療の提供を目指すことに繋がっています。

看護部職員について、日々漫然と業務を行う のではなく、患者さんに安全で安心・安楽な看護 を提供するために、私たちは何をすべきなのか今 一度振り返り、専門職としての自覚を持って職務 を果たしていけるよう指導していきたいと思いま す。そして職員がやりがいを持ち、元気に働ける 職場環境を構築することが、私の役割と考えて います。

地域の皆さまに期待される小畠病院であり続けられるよう、今後も努力していきたいと考えておりますので、温かいご理解、ご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

本年が皆さまにとって良い年でありますよう、 心よりお祈り申し上げます。



創立60周年を迎えるにあたって



(1983~ 1992年)





~敬太郎徒然日記~

「今に繋がる病院体制拡充のために』

【内科について】

1983年(S58)4月帰郷後当分の間常勤内科医は私だ けでした。当時父の同級生の故・榎木頼文医師が毎週 木曜日に広島から来て下さっており、加えて同年9月 より旧知の正岡佳子医師に週1回の内科・循環器内科 の診療を手伝って頂けるようになりました。1984年4 月から広島大学第1内科(当時)より非常勤の消化器 内科医の派遣が始まり、そのうちの一人が現副院長の 原医師です。その後広島大第2内科から非常勤医師と して呼吸器内科医を定期的に派遣して頂けるように なりました。そして現在では広島大学脳神経内科(第 3内科)から常勤神経内科医1名と非常勤医2名、さ らに非常勤ながら岡山大学から循環器内科医、川崎医 大から糖尿病内科とリハビリテーション科の支援を 受けています。これら内科全体を原副院長がまとめて くれています。

【ESWLと外科について】

1989年(H1)春、私の弟・小畠敏生が帰郷し外科・胃 腸科を標榜し、その時胆石治療と尿路結石治療の目的 でESWLを広島県東部で初めて導入しました。

しかし外科で当初見込んでいた胆石治療に対する ESWLの効力は思わしくなく、早々と見切りをつけて 腹腔鏡下胆のう摘出術を導入し、その実績は当地でも 一定の評価を受けていました。その後はヘルニア、急 性虫垂炎など消化器外科の症例も徐々に少なくなり 2002年3月に小畠敏生医師が退職。後任に私の慶応大 の同級生で元・川崎医大内分泌外科講師の片桐誠医師 が着任。専門である甲状腺疾患の診療と一般外科、そ して療養病棟の患者さんの全身管理も担ってくれて いましたが、2016年3月には定年退職。その後、中井医 師と和久医師に引き継がれましたが2021年3月に二 人の退職とともに外科診療は休止となりました。

【泌尿器科について】

一方、泌尿器科では前任医の退職に伴い、1990年(H2) 1月から広島大学より常勤の泌尿器科医を交代で派遣 して頂けるようになりました。その初期に当時広大泌 尿器科医局長だった安川明廣医師が初登板となり、そ れが当院の泌尿器科の新たな出発となりました。ここ から非常勤医師の派遣も加わり当院での非観血的尿路 結石の治療は勿論、泌尿器科診療全体が軌道に乗りま した。さらに一旦大学に戻っていた安川医師が1993年 (H5) に当院副院長として再登板になったことで、徐々 に患者さんや手術件数が増え、広くは県東部全域、特に この福山・府中2次医療圏における泌尿器科診療に大き く貢献できるようになりました。現在はこの態勢を大 口泌尿器科部長が引継ぎ奮闘してくれています。

【眼科について】

1992年(H4)6月、川崎医大より常勤眼科医として瀧 川医師が着任。当時この地域の数少ない眼科医で、日常 のプライマリーな眼科診療から白内障の手術まで積極 的な診療を行っていました。今でも糖尿病や循環器系 疾患あるいは神経系の病気の眼科的チェックまでお願 いできて、この地域において極めて貴重な存在です。

【看護熊勢(体制)について】

一方、このように診療面で拡充するだけでなく、看護 体制の確立も重要なポイントでした。正木総婦長の着 任後その指揮のもと、念願の基準看護の承認を受けま した。ここでやっと目指す機能的な病院としての形を 整えることが出来たわけです。ここまで、帰郷後約10年 かかりました。

このように医師の態勢と診療内容が明確となり、当 院の役割を考えた看護態勢(体制)の構想に基づき、療 養環境の改善や患者さんやスタッフの動線を整えるた め、1992年(H4)年度の厚生省の補助金を受けて本館の 改装と中館の増築を行うことが出来ました。





お友達登録を お願いします



